

ばならない。美而善なる事をなにも知らず、人間的ならびに市民的徳の何たるかを知らずにいながら、自ら知れりと思つての思い、この思い込みを、ソクラテスはまず第一に粉碎して、廃棄させなければならなかつたのである。その思いは無いよりもかえつて悪い「咎むべき無知」(29b)に他ならないからである。というのは、知つていないので知つてゐると思ふこの誤まちがかかる知「無知の知」を隠蔽してしまひ(22d)、その結果、その思いに自己満足して探究を怠ることになるからである。

同朋の魂を気づかいながらも、「未だかつてなにひととの教師になつたこともない」(33a)といふソクラテスはこう言つてゐる。

「富者にも貧者にも等しくこの身を提供して質問させ、そうしてもしひとが、答えてわたしの言ふことを、聞きたいと思つならば、

聞かせるのです。そしてかれらの或る者が優れた者になるにせよ、

ならないにせよ、わたしがその責めを負うのは正当ではないでしょ。というのは、わたしは未だかつていかかる学知を約束した

ことも教えたこともなかつたのですから。」(33b) と、こゝでソクラテスが徹頭徹尾拒んでいるのは、学知を他に与えるといふことである。それはソクラテスが、他者の魂は気づかわれるべき価値がないと考えたからではなく、むしろかれの魂を気づかう唯一

の方法は、かれ自身が無知の自覚者となつて「自分ができるかぎり善くなるように努力する」(39d)ことである、と考えたからだと思われる。ゆえに、他者もまた「善き魂」の探究者、徳の探究者となる。したがつてソクラテスが自己の無知を公開することによつて、徳は常に問われ吟味されるべきものとして、ソクラテス自

身をはじめその他の人々のもとに、あることになる。これが他を探究へと、愛知へと導くことになる。ソクラテスの「愛知しつつ、そして、自己ならびに他者を吟味しつつ」とは、ソクラテスの知（無知の知）を他者と共に共有し、共に愛知へと励む共同探究の行道であつた。

① 金松賢謙著『プラトンの神学と宇宙論』（法藏館・一九七六年）第二部Ⅱ(3)一七三頁における金松訳に依る。

② 同書同頁における金松訳に依る。

デュルケムのアノミー論

寺 健

アノミー(anomie)（語源は lawlessness を意味するギリシャ語 anomia）を社会学の術語として最初に用いたのはデュルケムである。それは最初の著作『社会分業論』において、社会的連帯を欠いた病理的分業形態を形容している。この著作で彼が意図したこととは、分業の発展に伴う有機的連帯が支配的となる近代社会において、有機的連帯の理想的効果を現状の病理的分業に対比して示し、凝集性と活力を欠く現実社会の道德的再統合という社会的要求（実践的課題）に答える分業体系を提唱することであった。究極的には、増長する個人主義の利己的性格を規制して、個人の人格の多様性と自律性、さらには人間としての尊厳が職業上の結合の機能的で公正な再編において生かされ、そこで道德的義務の

体系を得て全体社会との緊密な依存関係を確立することが目差されていた。さて、デュルケムは病理的分業として無規制的分業と拘束的分業をあげた。無規制的分業とは産業的恐慌や倒産・資本と労働の対立・階級闘争等にみられる、正常的には諸機能間の充分な接触や相互依存関係の結果うまれる規制が、欠けるか解体化したものである。拘束的分業はその規制が階級的な所有関係によつて支配されている場合である。例えば、職業の分配が能力によらずに不公平となつている様に。デュルケムはアノミーという語を、まずは社会的連帯を育まない病理的分業形態として、特に前者の規制のない状態という意味で使つた。A・コーヘンによると、「社会体系の要素間の関係を統制するうえでの重要なメカニズムである共通の規則の母体が崩壊してしまった状態で、「無規範」(normless)とか「規則の解体」(deregulation)とかの意味に近い。唯、『社会分業論』が出版された一八九三年の時点では、アノミーを産業界全般や全体社会において捉えるのではなく、分業の病理形態の一つとして職業集団内の相互作用の不充分ゆえの無規制というミクロ社会学的レベルで捉えている。そしてアノミーは例外的な現象であり、正常な分業の職業的凝集によつて解決されるものであった。しかし旧来の伝統的な宗教的・道徳的規範が資本主義的産業化の進展と共に弱体化してきたにも拘わらず、それにはかわりうる新たな道徳的等価物を作りあげるに至つていなかつてから、道徳的な価値体系が崩壊の一途を辿り、集合的な社会生活の全面的危機が招来しているとする。アノミーの背景である社会変動過程の現実認識は表明されていた。そして分業による

規制こそ新たな道徳であった。

四年後の一八九七年に出版された『自殺論』において、アノミーは一つの概念となり、自殺原因に數えられる。デュルケムは自殺原因を社会的・文化的構造の特性と関連づけて説明し、自殺傾向を含む集団属性として四つの型をあげた。利己的自殺・愛他的自殺・アノミー的自殺・宿命的自殺である。利己的自殺とは、個人が所属する社会集団の不統合の為に常軌を逸した個人化から生ずる個人的理由の個人的解決としての自殺である。例えば、プロテスタンントの自殺率がカソリックのそれより多い原因として集団的結合の弱さと信仰の自由さをあげている。愛他的自殺は、自己犠牲を強いる集団的压力による義務的集団本位の自殺であり、集団の負担になる老病人の自殺や、軍人の軍隊の名誉を重んじる自殺や殉死等がある。前者は過度の個人化が原因であり、後者は過度の集団化による。何れも個人が社会に結合する様式に関係する。これに対して、アノミー的自殺と宿命的自殺は個人を社会が統制する様式に関係する。つまりアノミー的自殺は統制の欠如が原因であり、宿命的自殺は囚人や奴隸の場合の様に過度の統制・抑圧が原因である。ところで、アノミー的自殺を定立するにあたり、デュルケムは経済的不況下と激しい繁榮期との高い自殺率に注目して、共に社会的変化が激しくて集合的秩序を揺がすところに共通原因をみた。前者の経済的破綻においては、個人の社会的地位の没落現象があり、正当視されていた欲求は厳しく自制され、期待は裏切られて苦悩や耻辱や欲求不満を感じ、絶望に陥つて死に向かう。後者の繁榮期における勢力と富の突然の増大は、それま

での欲求を規制していた社会的には認された規範や規準を崩壊させ、個人は無規制状態に陥って欲求を無限に膨脹させ、止み難い渴望に苦しめられて死に向かうのである。後者がアノミー的自殺である。利己的自殺の個人は集合的な目的の欠如に苦しんでいるのに対し、アノミー的自殺の個人は自らの活動に位置づけられた規制の欠如、つまり人間の本性の調整を欠いて苦しんでいる。目的に前進しているという保証は手段の適切な支配のみならず、目的自体の明確な限定に依存している。突然の繁榮はそれを不可能にするのである。他方、社会が個人を優越した集合的道徳的権威を有して個人を規制している安定した社会では、「人間が正当に追求することの許される幸福、快適さ、贅沢の量」である社会的職務の相対的な価値や報酬や職業従事者の生活水準は、漠然とした社会の道徳意識である世論等によって正当とみなされた暗黙の規定があり、それが欲求の中庸の健全さを支えて、「幸福や快樂の配分」を行なう。「職務への人員の配分」も同様である。ここでは個人の経済的目標は明らかとなり、「個人は自らの活動に相応しい代価として正当に望みうるものをするだけである。」

以上、デュルケムのアノミー概念を整理すると、それは単なる無規制状態から進んで、「幸福や快樂の配分」「職務への人員の配分」を司る伝統的の規準が権威を失って、欲求の社会的限界が取扱われた状態を意味することとなつた。そして、デュルケムはアノミーの慢性的状況を商工業の世界にみていた。経済の発展は宗教や政治権力の規制を解き放つことを通じて進められ、経済が社会の至上目的となつた為に、アノミーが景気変動の現象によって

頻発しているからである。この経済的アノミーに、配偶者の死による自殺や離婚者の自殺である家族的アノミーを加える。やはり集合的秩序の統制的機能が崩壊する為である。『自殺論』結論部以後のデュルケムの著作はアノミーに対する救済という実践的志向の展開である。職業的・政治的・教育的・人道的等々。それはまた、欲求の無規制な自己充足を助長する、自由主義経済学理論が準拠している功利主義的人間観に対する批判の展開である。もはや、アノミーは全体社会のマクロ社会学的レベルの問題となつたが、デュルケムは「秩序の問題」としてのアノミーの理論化よりも、「道徳の科学」として、その救済という実践に关心があつた。いずれにしろ、デュルケムのアノミーの分析法は価値からのアプローチとして、欲求の限界が失わればバーソナリティの安定が崩れるという理論的志向を示し、内面化した価値の制度化が不充分だと逸脱行動が生ずると論ずるR・マートン等に受け繼がれる。

（附記 紙幅の都合上、註は割愛した）

村落寺院としての近世山伏寺院

——越中礪波郡山伏法船寺の例——

木 場 明 志

近世村落に定着居住していた山伏を定着修験と称している。定着修験に関する研究は、修験道史そのものの一環であることはもとより、村落内祭祀の実態を知ることから村落住民の精神生活を